

山口 勸編

『社会心理学—アジアからのアプローチ』

(東京大学出版会、2003年、A5判、236頁、2,600円)

古家 聡

1. はじめに

多くの学問分野で、欧米の特に、アメリカの研究や理論が中心的役割を果たしていることを認めつつも、それらが必ずしもほかの文化では当てはまらなかったり、あるいは、まったく違った意味をもったりすることに、英語の論理や発想法を強く感じることもしばしばである。その典型的な事例は、たとえば、「英語教育」の分野における「外国語教授法」や「異文化コミュニケーション」の分野における「2項対立の発想法」などにおいて見られる。英語圏では適用できる方法論であっても、日本においてそれがそのまま適用できるとは限らないということは、普遍性を重視する学問研究にあって、見落としてはならない要素だと思う。

本書は、副題に「アジアからのアプローチ」とあるように、まさに「欧米における理論や知見の一般性を批判的に吟味している」ことが、大きな特徴である。また、社会心理学という題名がついているが、内容は異文化コミュニケーションに関係する示唆に富んだ論文が多い。計12名の執筆者による15編の論文の題名をリストアップすると次のようになる。

1「アジアの社会心理学へ」(山口勸)、2「研究法入門」(山口勸)、3「個人主義と集団主義」(山口勸)、4「『自己』への文化心理学的アプローチ」(北山忍)、5「文化と関係性」(村本由紀子)、6「文化の継続性」(嘉志摩佳久)、7「集団間関係と社会的アイデンティティ」(ジェームズ・リュー)、8「グループ・ダイナミックスの理論」(杉万俊夫)、9「文化とコントロール志向」(山口勸)、10「信頼」(山岸俊男)、11「甘え」(山口勸)、12「紛争解決」(大淵憲一)、13「中国人の社会的行動」(梁・井上ゆみ)、14「韓国人の社会的行動」(金義哲)、15「文化間コミュニケーション」(渡辺文夫)

2. 本書を織りなす一貫した姿勢

本書評で主に取り上げるのは、編者である山口勸の5編の論文である。山口は東京大学大学院人文社会系研究科教授で、社会心理学の専門家であるが、集団主義と個人主義など、異文化コミュニケーションのテーマに関する論文も多数ある。

1「アジアの社会心理学へ」では、社会心理学はアメリカにおいて大きな発展を遂げたこと、そして、アメリカでの研究結果が日本でも当てはまることが多いが、当てはまらないこともまた多いとし、さまざまな文化における人の心の働きや行動を説明できる理論が必要であると説く。欧米で提唱されている理論が、そのままアジア人に適用できるとは限らない例として、フェスティンガーの認知的不協和理論(Festinger, 1957)を取り挙げ、アメリカではこの理論から導き出された仮説を支持する研究もたくさん報告されているが、日本ではこれを支持する研究結果は少ないこと、また、最近のハイネとレーマン(Heine & Lehman, 1997)の報告として、カナダ

人では認知的不協和理論の予測どおりの結果が得られるが、日本人では得られないことを紹介している。そして、山口は「欧米で成立した理論をそのままアジアに持ち込むことが適切ではないことを意味している」と結ぶ。

この山口の姿勢は、日本あるいはアジアの文化が西欧文化よりも価値があると主張しているわけではなく、西欧の理論を導入して日本文化で適用する際に必要な修正点は何か、あるいはその理論の前提は正しいかを考察すべきだということで、この姿勢は異文化コミュニケーション研究を行う際にも欠かせないだろう。

次に、2「研究法入門」では、研究の進め方についての具体的な提言をしてくれる。まず、「社会心理学をとくにアジア的な視点から考えるといても、科学的な研究法が必要なことに変わりはない」とし、一般的に、2つの事柄の間に因果関係を推測するには、以下の3つの条件が必要だとする。

- ①想定される原因と想定される結果が共変していること（評者注：共変とは原因となる事象と結果となる事象の間に相関関係が存在すること。共変動ともいう）
- ②原因が結果に先行していること
- ③観察された関係に対する別解釈が除外できること

この条件をもとに、具体的に「暴力番組を見ることが攻撃行動を引き起こす」という因果関係を分析していく。さらに、実験研究の「内的妥当性」と「外的妥当性」の重要性にもふれている。前者は「原因になると予想される要因を操作し、それが結果として生じると予想される行動などに与える影響が効果的であること」であり、後者は「その実験で得られた結果が、どのくらい一般化できるか」ということである。特に、文化的に見た外的妥当性は、異文化コミュニケーション研究では非常に重要であろう。これは emic と etic という概念で説明されるように、ある特定の社会でしか見られない現象と多くの社会で見られる共通の現象とを区別して考えなければならないということである。比較文化研究では、特に忘れてはならない考え方である。

さらに、「測定法」で注意すべきこととして、こう記している。「たとえば、日本人は極端な回答を避ける傾向があると考えられる。何でも肯定的に答える傾向や、要求特性も、特定の文化では他の文化よりも強いかもしれない。」このようなことも、われわれが質問紙でのデータを取ったり、質問項目を考える際に意識すべき点であると思う。

3「個人主義と集団主義」は、集団主義とその対概念であるとされる個人主義についての理解を深めることのできる論考である。まず、集団主義を「個人の利益と集団の利益とが対立したときに、集団の利益を優先させる傾向」とし、一方、個人主義を「個人の権利や好みを重視し、それらが集団の利益に優先すると考えること」としている。濱口恵俊（1977）の日本人の集団主義を人間関係の重視という視点からとらえた「間人主義」に関して「それは相互依存主義および相互信頼主義によって特徴づけられ、対人関係それ自体が価値をもつものであるという」と紹介するが、同時に「このような指摘は確かに日本人の行動傾向を的確に言い当ててはいるが、それが日本人に特有なものだという確証はない」とも述べる。

また、集団主義と個人主義を考えるにあたっては、「個人」のとらえ方の違いにも注目する。マーカスと北山（Markus & Kitayama, 1991）の説を援用して、「個人は離れ離れでなく、お互いに結合しあっているという理解」はアジア人に特徴的であり、「個人はそれぞれ他者から分離したものとみなされている」と考えるのは西洋文化であるとする。

文化比較の点では、ホフステッド (Hofstede, 1980)、メリット (Merritt, 2000)、オイサーマンら (Oyserman, Coon, & Kemmelmeier, 2002) の説により、「集団主義は日本文化に固有のものではなく、少なくともアジアなど他の文化と共通点があるものだ」と理解するのが適当である」と結論づける。

山口自身は、Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Shwartz, 1998) を個人主義と集団主義に対する態度に応用した研究を行い、「日本人学生のうち約半数は自分と個人主義的な特性を (集団主義的な特性よりも) 結び付けやすいという結果が得られている」(村上・山口, 2002) と述べ、「日本人が一般にいわれているほど集団主義的ではないことを意味しているのかもしれない」と書く。ただし、結論は急がずに、「日本が他の国と比べて、相対的に集団主義的なか個人主義的なのかについて判断するためには、外国でも同様のデータを収集して、文化間の比較をする必要がある。また、この結果が学生に限定されたものであるかどうかという点も検討する必要がある」とまとめている。異文化コミュニケーションに関する実験やアンケートの対象が、多くの被験者を得ようとするあまり、どうしても大学生などの学生に限定されてしまうのは、どの文化でも同じかもしれない。もちろん、大学生は社会的経験が不足していることから、その文化を必ずしも代表しているとは言えないということをわれわれは留意しなければならないだろう。

この論の最後に山口は、この分野での第一人者のひとりであるトリアンディス (Triandis, 1995) の、個人主義も集団主義も垂直的なものと水平的なものに分類できるとの主張を紹介し、さらにキム (Kim, 1994) の個人主義および集団主義のどちらにもさまざまな形態がありうるとの論を取り上げ、「この問題についての結論はこれからの研究を待たなければならないが、少なくとも個人主義と集団主義とは常に対立したものではないと考えるのが適当であるように思われる」と結んでいる。

9「文化とコントロール志向」では、1つのキーワードが登場する。それは「折り合い」という言葉である。本論文では、われわれは、自然や他者と何らかの仕方で折り合いをつけて生活しているという前提のもと、コントロールという概念を使って、文化の折り合いのつけ方の違いに焦点を当てている。ここでも、アメリカ対アジアという分け方によって、そのコントロールの仕方の違いを浮き彫りにして見せる。つまり、自分の周囲をコントロールの対象とする「1次的コントロール」がアメリカ人に多く見られ、自分自身をコントロールの対象とする「2次的コントロール」が日本人に多く見られるというワイツらの主張 (Weisz, Rothbaum, & Blackburn, 1984) を批判し、「この区別はコントロールの対象に関するものであり、文化差を理解するにはコントロールの主体の違いも考慮する必要がある」とする。要するに、アジア的コントロールとは「直接的に対決して幸福感を得るというよりは、うまく相手と共存したり、懐柔したりして、より安定した関係をつくろうとする」ことだというのが山口の見方である。

このような見方は、まさに環境や自分が置かれている状況とどう向き合うかといったテーマにも関連してくるだろう。環境を自分の力で変えていこうとするのか、与えられた環境の中で調和がとれた関係を達成しようとするのか。アジアでは後者の志向が強いことの例として、「加齢」を挙げている。シンガポールのチャンら (Chang, Chua & Toh, 1997) は、131名の中国系シンガポール人の高齢者を対象にして、質問紙による研究を行った。その結果によれば、「加齢に対する態度が好意的であるほど、人は加齢によるストレスを経験せず、健康でいられる」というものであった。もちろん、「健康的であるから加齢に対して好意的になることも考えられるので、さらに検討する必要があるが、つねに個人が直接的な1次的コントロールを行えることを望まし

いと考える立場とは対照的である」と述べている。

山口の11「甘え」という論考は、土居（1971）によって知られる日本人の心性の一要素である「甘え」についての、再考察である。山口は、「甘え」の理論が精神分析のみならず心理学や文化人類学などの分野にも大きな影響を与えているが、「その概念を曖昧なままにしておくことは甘えに関する研究を進めていくうえで、大きな障害となる」と述べ、竹友（1988）の「甘え」の定義をもとに、「甘え」を自分の行動や願望が、相手からは不適切とみなされているにもかかわらず、相手がそれを受け入れることを期待すること、と定義する。

また、土居の『甘えの構造』の英訳のタイトルが“The Anatomy of Dependence”（Doi, 1973）となっていることから想像できるように、甘えと依存とは混同されてきたと述べる。しかし、両者は区別すべきだとして、甘えは「無条件の愛・好意への欲求とコントロールへの欲求から成るという仮説のもと、それは相手との一体化によって実現する」が、依存は「その対象を自分に同化させることはできないはずで、依存しているほうがコントロールされる」という違いを見いだす。

さらに、山口は、「甘えと依存を同一視して、社会的に望ましくない行動であるとみなせば、安定型の子どもが甘えるとは考えにくい。ところが、甘え行動は必ずしも不適応な行動ではなく、依存とも異なると考えれば、安定型の子どもが甘え行動をしてもおかしくはない」と述べる。そして、「好ましい甘えは安定型の子どもに見られ、好ましくない甘えは不安定型の子どもに見られる」として、一般の人が甘えに対して良い面と悪い面を認識し、好悪感情をととももっているというアンビバレントな評価も紹介している。

3. その他の論文

以上、紙幅の関係で本書の中心をなす山口の5編の論文のみを見てきたが、他の論文も多くは質の高いものであった。特に、異文化コミュニケーション研究の立場からは5「文化と関係性」（村本由紀子）と15「文化間コミュニケーション」（渡辺文夫）は非常に刺激的であった。

前者は、「同じ日本人、または同じアメリカ人であっても、関係性が異なれば、別の傾向が見いだされる場合もある」ことを主張する力作である。たとえば、「日本社会では相互配慮的な関係性が優勢で、アメリカ社会では相互独立的な関係性が優勢」などの記述にうなづくことが多かった。

また、後者は、応用言語学者で英語教育者の吉田研作、さまざまな企業で企業内研修の開発研究と指導を行ってきた井上正孝、文化人類学者で国際捕鯨委員会にも日本のアドバイザーとして出席してきた高橋順一、そして上智大教授の渡辺自身の4人の論考を「場」というキーワードでくくって、東洋と西洋の認識論の違いを明らかにしている。英語教育、組織コミュニケーション、国際コミュニケーション、それぞれの分野で参考になるだろう。

文献（本書評で言及したもののみ、取り上げた章ごとに掲載）

1「アジアの社会心理学へ」

Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*. Evanston, Ill.: Row Peterson.

Heine, S. J. & Lehman, D. R. (1997) Culture, dissonance, and self-affirmation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23 (4), 389-400.

3 「個人主義と集団主義」

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implied cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.

濱口恵俊 (1977) 『日本らしさの再発見』 日本経済新聞社

Hofstede, G. (1980) *Culture's consequences*. Beverly Hills, CA: Sage.

Kim, U. (1994) Individualism and collectivism: Conceptual clarification and elaboration. In U. Kim, H. C. Triandis, C. Kagitcibasi, S. C. Choi, & G. Yoon (Eds.), *Individualism and collectivism: Theory, method, and applications* Thousand Oaks, CA: Sage. 19-40.

Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

Merritt, A. (2000) Culture in the cockpit: Do Hofstede's dimensions replicate? *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 31, 283-301.

村上史朗・山口勲 (2002) 「The Implicit Association Test による潜在的認知の一貫性の検討—自己・集団主義・快さの概念間の連合を用いて」『日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集』 72-73.

Oyserman, D., Coon, H. M., & Kemmelmeier, M. (2002) Rethinking individualism and collectivism: Evaluation of theoretical assumptions and meta-analyses. *Psychological Bulletin*, 128, 3-72.

Triandis, H. C. (1995) *Individualism and collectivism*. San Francisco, CA: Westview Press. (神山貴弥・藤原武弘編訳、(2002) 『個人主義と集団主義』 北大路書房)

9 「文化とコントロール志向」

Chang, W. C., Chua, W. L., & Toh, Y. (1997) The concept of psychological control in the Asian context. In K. Leung & U. Kim (Eds.), *Progress in Asian Social Psychology, Vol. 1* Singapore: Wiley. 95-117.

Weisz, J. R., Rothbaum, F. M., & Blackburn, T. C. (1984) Standing out and standing in: The psychology of control in America and Japan. *American Psychologist*, 39, 955-969.

11 「甘え」

土居健郎 (1971) 『「甘え」の構造』 弘文堂

Doi, T. (1973) *The anatomy of dependence*. Translated by John Bester. Tokyo: Kodansha.

竹友安彦 (1988) 「メタ言語としての『甘え』」『思想』 768, 122-155.